

松本歯科大学に於ける初診患者の数計的観察 (昭和52, 53, 54年度)

徳植 進, 佐藤 透, 藤田 研
中村 亨, 賀数 恵, 萩原 健

松本歯科大学 総合診断学・口腔外科学教室 (主任 徳植 進 教授)

Statistical Observation on the First Consultation Patient
in Matsumoto Dental College During a Period from 1977 to 1979

SUSUMU TOKUUE, TOORU SATOU, KEN FUJITA,
TOORU NAKAMURA, KEI KAKAZU and KEN HAGIWARA

*Department of Oral Diagnostics and Surgery, Matsumoto Dental College
(Chief: Prof. S. Tokuue)*

Summary

Matsumoto Dental College greeted the 10th year of its foundation. Clinical practice for students started from 1977 is in the fifth period. The number of the first consultation patients in 1977, 1978 and 1979, was analyzed.

Results were as follows:

- (1) The numbers of the first consultation patients were 4,325 in 1977; 4,404 in 1978 and 4,015 in 1979.
- (2) Patients were comparatively many in June, and a slight decrease in April and December.
- (3) Regarding to the age, patients in 0 to 10 year-old were the largest number, and 21 to 30 year-old was the second and 31 to 40 year-old was the third.
- (4) The largest number of the first consultation was in pedodontics, the second was in oral surgery, and the third was conservative dentistry. The next was prosthetic and orthodontics. The number of dividend patients of periodontal disease and preventive class had decreased.

1. はじめに

松本歯科大学は現在、創立以来10年目を迎え、

(1982年5月10日受理)

最高学生による臨床実習も、早や6期目を数えている。第1期の臨床実習が開始された当時、県下では568歯科医院、691名の歯科医師により診療が行われており、また、県内各地区出身の404名の学生が全国の歯科大学に学んでいた頃である。ここ

に私共は、その臨床実習が始まった昭和52年度から54年度までの来院初診患者とその配当料を先ず数え、本大学病院の患者傾向を小括し、今後の資料となしたいと考えた。

2. 資料及び調査方法

昭和52年4月より昭和54年3月までに来院した新患は、計12,744名(内不詳患者16名)で、カルテ、初診記録簿、診療申込書を基にし、昭和55年度分の一部と最近1ヶ年分(昭和56年度)の処置件数も附して、その傾向をみたものである。また、某国立大学歯学部、某私立歯科大学の患者資料も参考にさせていただき括めたものである。

3. 調査結果

(1) 年度別患者数(表1, 2)

52, 53, 54年度の初診患者は、表1の如く、総計12,744名で、52年度=4,325名、53年度=4,404名、54年度=4,015名(55年度=3,819名)であった。各年度の月平均は、360.4名、367.0名、334.6名、318.3名と、やや減少傾向を示すもののほぼ安定した初診患者数と見てよからう。因みに、A校、B校、C校(本学)の3校を比較してみると、表2の如く、地方小都市の新設歯科大学としては、予想以上の初診患者が数えられたものである。

(2) 月別患者数(図1, 表3)

各年度を通じて、月別初診患者数で目立つのは6月で、年間初診患者の9.9%を占める一方、4月、11月、12月が減少する傾向を見せている。本学の立地条件からみて、この傾向は、i) 農繁期、ii) 入園および入学期、iii) 師走の忙しさ等が重なり合っているものと考えられる。

因みに、小児歯科、保存料、口腔外科の4月、6月の初診患者数でこの月別消長をみると、他科に比し、小児歯科が4月に減少し6月に多い傾向が示されている。これは、入園、入学期と、5月の健康診断をはさんで、口腔衛生週間の6月に来院する結果と推察される。なお、この様な傾向は、矯正科初診患者にもみられた。

(3) 男女別患者数(表1, 4, 図2)

総計における男女比は、男性6,432名対女性6,309名で、その%比は、52年度=49.0:50.3, 53年度+52.6:47.3, 54年度=50.5:49.5, 平均50.9:49.1であり、男女間における差は見られなかった。ある大学にては男性患者がやや多い所もあり、また、ある大学では、圧倒的に女性患者が多く、その職業に主婦層に多いと報告されているが、これらの地域差はあって然るべきであろう。

(4) 年齢別患者数(表4, 図2)

今、これら初診患者の年齢分布を調べると、特に多い年齢層は、0才~10才で、計4,544名を数え(52年度=35.47%, 53年度=36.01%, 54年度=

表1: 各年度男女別患者数

年度 性別	52年度	53年度	54年度	総数
男	2,148名 (49.7%)	2,316名 (52.6%)	1,968名 (49.0%)	6,432名 (50.5%)
女	2,174名 (50.3%)	2,088名 (47.4%)	2,047名 (51.0%)	6,309名 (49.5%)
計	※不明3(0.07) 4,325名 (100%)	4,404名 (100%)	4,015名 (100%)	※不明3(0.02) 12,744名 (100%)

表2: 3校(A, B, C校)比較

年度	A校	B校	C校
52年度	9,043	3,181	4,325
53年度	9,312	4,580	4,404
54年度	8,423	3,897	4,015
計	26,778名	11,658名	12,744名

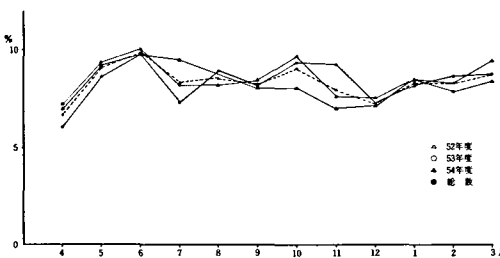


図1: 各年度月別患者数(%)

表3: 4月と6月における患者数の動き(3年間総数)

	4月	6月	比
小児	1.75%	3.52%	1:2
保存	1.67%	2.08%	1:1.25
口外	2.06%	2.25%	1:1.1

表4：各年度年齢別男女別患者数

年齢	52年度		53年度		54年度		総数	
	♂	♀	♂	♀	♂	♀	♂	♀
0~10才	747 (17.27)	787 (18.20)	826 (18.76)	760 (17.26)	725 (18.06)	699 (17.41)	2,298 (18.03)	2,246 (17.62)
	1,534 (35.47)		1,586 (36.01)		1,424 (35.47)		4,544 (35.66)	
11~20	209 (4.83)	212 (4.90)	207 (4.70)	192 (4.36)	178 (4.43)	227 (5.65)	594 (4.66)	631 (4.95)
	421 (9.73)		399 (9.06)		405 (10.08)		1,225 (9.61)	
21~30	391 (9.04)	447 (10.34)	514 (11.67)	420 (9.54)	366 (9.12)	350 (8.72)	1,271 (9.97)	1,217 (9.55)
	838 (19.38)		934 (21.21)		716 (17.83)		2,488 (19.52)	
31~40	295 (6.82)	304 (7.03)	289 (6.56)	320 (7.27)	258 (6.43)	309 (7.70)	842 (6.61)	933 (7.32)
	599 (13.85)		609 (13.83)		567 (14.12)		1,775 (13.93)	
41~50	231 (5.34)	193 (4.46)	187 (4.25)	178 (4.04)	198 (4.93)	187 (4.66)	616 (4.83)	558 (4.32)
	424 (9.80)		365 (8.29)		385 (9.59)		1,174 (9.21)	
51~60	147 (3.40)	134 (3.10)	177 (4.02)	120 (2.72)	136 (3.39)	158 (3.94)	460 (3.61)	412 (3.23)
	281 (6.50)		297 (6.74)		294 (7.32)		872 (6.84)	
61~70	91 (2.10)	65 (1.50)	76 (1.73)	64 (1.45)	68 (1.69)	75 (1.87)	235 (1.84)	204 (1.60)
	156 (3.61)		140 (3.18)		143 (3.56)		439 (3.44)	
71才以上	37 (0.86)	32 (0.74)	40 (0.91)	34 (0.77)	39 (0.97)	42 (1.05)	116 (0.91)	108 (0.85)
	69 (1.60)		74 (1.68)		81 (2.02)		224 (1.76)	
計	2,148 (49.66)	2,174 (50.74)	2,316 (52.59)	2,088 (47.41)	1,968 (49.02)	2,047 (50.98)	6,432 (50.47)	6,309 (49.51)
	※(不明3) 4,325 (100)		4,404 (100)		4,015 (100)		※(不明3) 12,744 (100)	

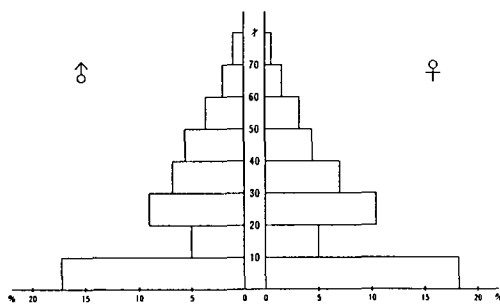


図2：年齢別男女別患者数(52年度)

35.47%)平均35.66%を示し、本学における新患の $\frac{1}{3}$ は小児歯科を受診していることが明らかになった。次いで、11才~20才では、計1,225名と減少しているが、21才以後では、21才~30才=2,488名、31才~40才=1,775名、41才~50才=1,174名、51才~60才=872名、61才~70才=439名、71才以上=224名で、増齡的に少なくなった結果を得ている。

(5) 各科別患者数(表5~7, 図3~4)

3ヶ年に亘る総計は、表5の如く、小児歯科=4,283名(33.6%)、口腔外科=3,259名(25.6%)、

表5：S52~54年度総数の月別各科別患者数

科	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	合計
総診 口外	26名 (0.20%)	38 (0.30)	38 (0.30)	41 (0.32)	42 (0.33)	27 (0.21)	12 (0.09)	20 (0.16)	26 (0.20)	65 (0.51)	57 (0.45)	35 (0.27)	427 (3.35)
予防	4 (0.03)	3 (0.02)	19 (0.15)	13 (0.10)	13 (0.10)	14 (0.11)	16 (0.13)	13 (0.10)	16 (0.13)	7 (0.05)	7 (0.05)	7 (0.05)	132 (1.04)
小児	223 (1.75)	383 (3.01)	449 (3.52)	401 (3.15)	363 (2.85)	338 (2.65)	405 (3.18)	323 (2.53)	296 (2.32)	358 (2.81)	362 (2.84)	382 (3.00)	4,283 (33.61)
歯周	28 (0.22)	39 (0.31)	34 (0.27)	26 (0.20)	33 (0.26)	31 (0.24)	40 (0.31)	31 (0.24)	40 (0.31)	47 (0.37)	57 (0.45)	44 (0.35)	450 (3.53)
保存	213 (1.67)	279 (2.19)	265 (2.08)	218 (1.71)	220 (1.73)	275 (2.16)	246 (1.93)	235 (1.81)	186 (1.46)	206 (1.62)	185 (1.45)	226 (1.77)	2,750 (21.58)
口外	262 (2.06)	94 (2.21)	287 (2.25)	248 (1.95)	261 (2.05)	252 (1.98)	274 (2.15)	307 (2.41)	280 (2.20)	238 (1.87)	259 (2.03)	297 (2.33)	3,259 (25.57)
補綴	69 (0.54)	67 (0.53)	100 (0.78)	89 (0.70)	82 (0.64)	70 (0.55)	86 (0.67)	51 (0.40)	56 (0.44)	98 (0.77)	79 (0.62)	77 (0.60)	924 (7.25)
矯正	28 (0.22)	50 (0.39)	60 (0.47)	22 (0.17)	69 (0.54)	35 (0.27)	63 (0.49)	27 (0.21)	20 (0.16)	43 (0.34)	33 (0.26)	56 (0.44)	506 (3.97)
不明	—	—	5 (0.04)	—	4 (0.03)	—	—	—	2 (0.015)	—	2 (0.015)	—	13 (0.10)
合計	8853 (6.7)	1,154 (9.1)	1,257 (9.9)	1,058 (8.3)	1,087 (8.5)	1,041 (8.2)	1,142 (9.0)	1,002 (7.9)	923 (7.2)	1,062 (8.3)	1,041 (8.2)	1,124 (8.8)	12,744 (100)

表6：

A校

	診断	予防	小児	矯正	保存	口外	補綴
53	703	1,130	1,326	555	1,929	2,555	845
54	847	1,037	1,440	618	1,728	2,707	935
55	752	819	1,259	696	1,570	2,572	757
計	2,302	2,986	4,025	1,869	5,227	7,834	2,537

B校

(内科・外科)

53	1,648	0	255	118	179	714	146	121
54	1,939	13	502	123	201	1,020	273	508
55	1,509	24	409	111	189	878	300	477
計	5,096	37	1,166	352	569	2,612	719	1,106

C校

(保存) (歯周)

52	64	30	1,440	163	1,169	68	1,057	325
53	226	68	1,491	173	782	206	1,128	315
54	137	34	1,352	167	899	166	1,074	284
計	427	132	4,283	506	2,750	450	3,259	924

表7：

	総診	小児	予防	歯周	保存	口外	補綴
初診	1432.8						
レ線	39.5	241.2	1.3	53.7	319.3	175.4	59.1
臨検	25.9	38.9	0.3	57.2	263.3	49.1	43.3
投薬	26.8	170.3	0.1	36.3	29.7	266.5	6.0
文書	略						
普通処置 洗浄に 属するもの	103.6	1499.8	28.6	197.9	734.7	313.2	310.0
外科的処置	12.9	150.3	0.5	18.5	18.3	195.6	6.4
充填	18.3	694.1	0.3	86.0	68.5	1.6	8.5
冠・義歯 固定装置など	4.0	170.8	0.5	15.2	103.0	5.5	112.4
総件数	1663.8	2965.4	31.6	464.8	1536.8	1006.9	545.7
口腔処置件数	138.8	2515.0	29.9	317.6	924.5	515.9	437.3

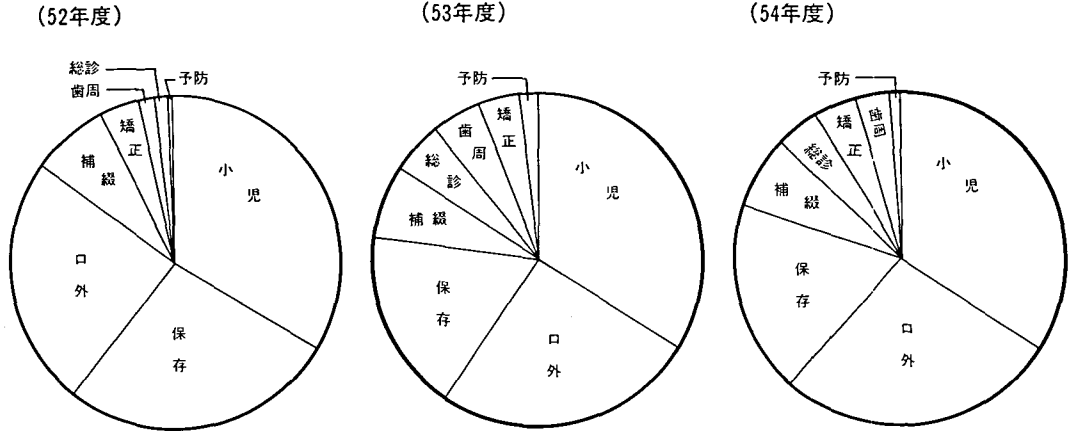


図3：各科別患者数

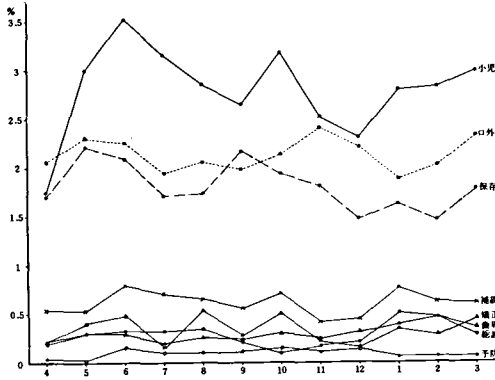


図4：S 52~54年度総数の月別各科別患者数 (%)

保存料=2,750名 (21.6%) を数え、これら3科で本学を訪れる初診患者の80%を越していることを知ったものである。図3は、各年度の各科別グラフで、図4は、その傾向を線グラフで示したものである。

歯科大学病院は、教育実習を主眼とする医療機関なるが故、各大学の立地条件、設立経過年月、並びに臨床実習形態と指導体制により患者来院の傾向は、各々独自の差を示すものであるが、一方、地域医療を分担している事実にはかわりがないので、共通した傾向も示されている。

ここに、大都市国立A校、中都市私立B校、小都市C校(本学)の3校のみではあるが、過去3年の各科別新患数を表にしてみると、表6の如くである。

初診患者の多い臨床科は、A校にては、口外→保存→小児。B校で、診断→口外→小児。C校で、

小児→口外→保存の順になっており、歯科大学病院を訪れる新患は、口腔外科領域疾患の診断と治療、次いで、小児口腔の継続的かつ徹底的な治療を求める傾向が共通していると考えられる。

しかしながら、承知の如く、各臨床科で日常に行われている診療は、これら初診患者と再来患者を合わせたもので、最近1ヶ年の本学各臨床科での1日1件当りの処置内容を分析した概要は表7の如くであった。すなわち、月平均の総件数は、小児歯科2,965.4件、総合診断治療室1,663.8件、保存料1,536.8件、口腔外科1,006.9件、補綴545.7件、歯周464.8件、予防科31.6件であった。

この調査結果から、初診、レ線撮影、臨床検査、投薬の件数を差しひくと、各臨床科において、術者が直接患者口腔に施した処置件数が残るわけで、これを小括すると、月平均小児歯科=2,515.0件、保存科=924.5件、口腔外科=515.9件、補綴科=437.3件、歯周病科=317.6、総診科=138.8件、予防科=26.9件の処置内容となっている。

因みにA校では、口外→保存→小児という初診数の順が、日常診療件数総計では、保存→口外→補綴となり、B校では、診断→口外→小児の初診数の順が、総計でも変わらないようである。

勿論、各臨床科の特徴があり、その処置的内容は件数のみで軽重をつけるべきものではないが、今後の各科共同しての調査結果から、各科への流れの実態など把えたいと考えている。

4. 要約、結語

本学では、総合診断学：口腔外科教室が、病院

における初診室、症例検討室、臨床実習計画室、総合診断治療室（観血処置室、小技工室、総診検査室などを含む）の運営に当っており、初診室を経てより各教育診療科へ患者が配当されている。

この立場から臨床実習開始以来、3年間の初診患者の動態を基に、調査を始め次の如き傾向を知り得たものである。(1) 年度別初診患者数は、4,015名～4,404名であり、月平均334.6名～367.0名の新患を診ている。

(2) 年間を通じては、6月に初診患者数が多く、4月、11月、12月にやや減少する傾向をみている。

(3) 初診時の男女患者数の比は、平均50.9%：49.1%でほぼ半数づつを占めている。

(4) 年齢別にみると、特に0才～10才の年齢層が35.47%～36.01%を示し、初診患者の4割が小児歯科を訪れており、高齢者になる程、その来院数は漸減していた。

(5) 各臨床科の初診配当患者は、小児歯科、口腔外科、保存科の順に多く、この3科で約80%を占めていた。

(6) しかし、最近1ヶ年の初診患者と再来患者を併せての日常臨床では、すなわち、初診、レ線撮影、臨床検査、投薬を除き、患者の口腔に直接治療処置を於てした件数を概括すると、月平均、小児歯科=2,515.0件、保存科=924.5件、口腔外科515.9件、補綴科=437.3件、次いで歯周病科、総合診断治療室、予防歯科の順を示していた。

以上の如き傾向を、他歯科大学、歯学部で初診患者並びに再来患者の動態を参考に考察すると、各校の立地条件、開設年月日、臨床実習形態と指導体系などで独自の傾向はみせるものの、歯科大学病院を患者が訪れる場合に、主に口腔外科領域の疾患に対しての診断と処置、並びに小児口腔の適切な継続治療が求められている傾向は共通しているといえよう。そして本学にては、特に小児歯

科の受診患者が多く目立っていた。

考えるに、初診時、患者の口腔状態は、多くの場合、1科、2科のみで完治すべき状態ではないので、教育実習を主眼としての歯科大学病院の特徴を充分満足させながら、地域社会に対する診療の一面を担うという立場から、患者の受診通院に対する教育的配慮は勿論のこと、より緊密な各臨床科の連係指導と、臨床実習学生の、一口腔内治療を念頭においたたゆまぬ実践を期さなければならぬ。

文 献

- 1) 高橋庄二郎, 北村実雄, 梯 照子 (1951) 最近満一カ年間にわが教室を訪れた患者の統計的観察. 歯科学級, 51: 55—58, 142—144.
- 2) 北村実雄, 太田 実, 鈴木和男, 古賀昭子 (1952) わが教室を訪れた患者の統計的観察. 歯科学級, 52: 228.
- 3) 市川信七, 内田 稔, 岡村実朗, 北川原征夫, 北村実雄, 桐原成光, 草薙雄進, 栗田幸夫, 小林則夫, 小林宏敏, 高見沢 清, 刀根川義一, 刀根川みよ子, 刀根川富美子, 中川虎雄, 堀内要之助, 水橋武男, 宮下敏彦, 和田吉彦, 田代弥平, 林春蔵 (1965) 主訴を対象とした歯科外来患者の臨床統計的観察. 歯科学報, 65: 144—152.
- 4) 本谷 昭, 北田武夫, 石橋真澄 (1965) 医大歯科外来患者の口腔疾患の実態について. 日保歯誌, 8: 116—122.
- 5) 高麗日出男 (1967) 僻地自動車診療の5年間, 歯界展望, 29: 569—573.
- 6) 榎原悠紀田郎 (1969) 愛知学院大学歯れ部付属病院新来患者の動向について. 口腔衛生誌, 19: 62.
- 7) 笹本正次郎, 三井男也 (1970) 昭和44年歯科疾患実態調査の解説. 歯界展望, 36: 1081—1086.
- 8) 宮原 照 (1973) 開設後10年間における矯正患者の実態調査. 愛院大歯誌, 10: 339—411.
- 9) 広瀬 秀, 寺田 誠, 渡貫 健, 西川文雄 (1974) 東北歯科大学附属病院開設1年目における外来患者の実態調査. 東北歯大誌, 1: 41—49.
- 10) 北村中也, 連 政男, 高梨英樹, 河井節夫, 寺田恵美子 (1975) 予防歯科で扱った2年間における初診患者の動態について. 鶴見歯学, 1: 37—43.